光明寺だより

第23号
浄土真宗本願寺派
光明寺

〒793-0030　西条市大町550
TEL 0897-53-4583

光明寺本堂・ＢＣＳ賞受賞！

さる七月二十一日、「第四十三回ＢＣＳ（建築業協会）賞」の最終選考会が東京で開かれ、光明寺の建物がみごと受賞いたしました。

まことに喜ばしい限りです。

今年は九十四件の応募があり、十八件の建築作品が受賞の栄に輝きました。

この賞は昭和三十五年に建築業協会によって創設され、毎年わが国を代表する建築物が表彰されています。

特にこの賞の特徴は施主と設計者と施工者の三者の協力が総合評価されるもので、設計、施工技術と共に、建物がいかに運用されているかといった事も審査の大きな対象になります。そのため築後一年以上経過したものでなければ応募できません。

今回の受賞は光明寺新本堂の運営が評価されたという事にもなり、大変大きな励みになります。

また、受賞作品は和英両文併記の「建築業協会賞作品集」として編纂され、その年の日本の代表的建築物として、広く海外に紹介されます。

（★受賞作品は七ページに紹介）

「秋の講演会」のご案内

★日時　９月７日　午後２時

★講師　南泉坊住職

岡部正顕先生

浄土真宗の宗風・・現世祈祷や、まじないを行わず、占いなどの迷信にたよらない

ひとくちほうわ 一口法話

「自分を生きる」

産経新聞の「朝の詩」に次のような詩が掲載されていました。

みんなすごい
カイズカイブキもモッコクも
ツツジもシャクナゲもアジサイも
すごい
スズメもカラスものらネコも
ムカデもアリンコもダンゴムシも
みんなすごい
みんな「自分」を生きている

いささかユーモラスな詩ですが、なるほど、その通りだなと、うなずかされるものがあります。

おそらくこの詩の作者は、何かのきっかけで、これまで何気なく眺めていた日常の風景を、改めて見つめ直したのだと思います。

すると、作者のその目に映ったものは、あらゆるものが懸命に「自分」を生きている姿でした。

その時、作者は「自分の生き方に比べ、みんな、なんと素晴らしい生き方をしているのだろう！」と、深い感動を覚えたのだと思います。

この詩にはそんな作者の生きることへの目覚めが伝わってきます。

ところで、この詩にある「自分を生きる」とはどういうことを言っているのでしょうか。

それは、「与えられた立場（境遇）を、我が身に引き受けて生き抜く」ということだと思います。

確かに、のら猫が「飼い猫になりたい」と愚痴をこぼしたり、松が「桜になりたい」と羨ましがったりはしません。

そういう事から言えば、あらゆる生き物は、それぞれ自分を生きています。

ところが、人間だけは与えられた立場（境遇）を中々引き受けようとしません。

「もう少しお金にゆとりがあればナー」「主人にもっと甲斐性があったらナー」「子供の出来がもう少し良かったらナー」「あの人さえいなければナー」等々・・・。

これでは到底「自分を生きている」とは言えません。

仏教では、私たちの世界は「因縁の道理」によって成り立っていると説いています。

それは例えば、朝顔は、タネという因に、土、水、太陽などの条件（縁）が整うことによって花が咲く（果）といったようなことです。

この因縁の道理を、私自身に当てはめてみるのです。すると「今の私は、こうなるだけの原因（因）と条件（縁）があって、今の私になったのだ」という受け止め方が出来ると思います。

この因と縁を我が身に背負って生きていくことを「宿業を引き受ける」とか「宿業の自覚」と言います。

「自分を生きる」とは、このようなことを言うのです。

ですから、松や犬が自分を生きているというのは、夫々が自分の宿業を引き受けて生きているということが言えます。

親鸞聖人は晩年、「弥陀仏は自然（じねん）のようを知らせん料（りょう）なり」ということをおっしゃっています。

（次ページに続く↓）

意訳しますと、阿弥陀仏という仏さまは「何事も、それは一切がそうならずにはおれない仕組み（因縁の道理）でそうなったのです、それをあなたの宿業として受けとめていきなさい。それが生きるという事の本来の姿です」と、時間と空間を貫（つらぬ）いて働く因縁の道理を私たちに知らせようとする仏さまだということです。

その阿弥陀仏の呼びかけ（南無阿弥陀仏）にうなずく時「私の人生に何が起ころうとも、自分の人生は自分の責任において果たしていく」という主体性のある生き方が生まれてきます。

思えば、私たちの人生には「これしか道がない。こうするより他なかった」といったことが、いくらでもあります。

それを他人のせいにしたり、或いは運命とあきらめるのではなく、それさえも自分の責任として果たしていく。そうして「こうするより他に道がなかった」ところに「我が身の宿業の深さ」をかみしめていくのです。

このように「宿業を引き受ける」という事は、まことに厳（きび）しい現実ではありますが、それが、生きるという事の本来の姿に帰るということなのです。

その本来のあり方に戻って生きる時、ただ今、私がこうして生きているという事実が、すでに私を超（こ）えた働きの中にあるということが分かってきます。

「息をする、心臓が動く、空気がある、水がある、太陽がある」等々、何もかもが、私が生きるために、そうならずにはおれない道理で出来上がっていたのだなということが分かるのです。

それは「この宇宙すべてのものが私を生かし続ける仏さまだった」という目覚めです。

そこに、人間に生まれた喜びと尊さがあると思うのです。

念仏者、竹部勝之進は

タスカッテミレバ
タスカルコトモイラナカッタ

と、書き記しています。

まさに「我以外皆我諸仏（わがしょぶつ）」です。

ジャズライブ風景
向井滋春クインテット

新盆合同追悼法要の模様

水面に浮かぶ灯籠

俳句を楽しむ（四）

森本隆を

暦の上では八月八日が「立秋」でした。俳句の季語や季節は、陰暦（旧暦）の時代に出来上がったものを今もそのまま使っていますから、現代の暦から見るとどうしても少し早めに感じられて、ピンと来ないことがあります。「八月八日に、今日から秋だといわれても、こんなにまだ暑いのにねェ。」と思うのも無理ないかも知れません。そのあたりを、「残暑」とか「秋暑し」などという秋の季語で、日本人得意の“融通をきかす”というワザを使うのでしょう。

「立秋」はまた、「今朝の秋」、「秋来る」、「秋に入る」などという言い方でも季語となっています。

千枚田穂肥利かせて今朝の秋

小谷喜久一

この句は順調な稲の育ちを喜こび、秋の到来を喜こぶ農業にたずさわる人の立秋の朝の素直な気持ちを無理なく詠んでいます。まだまだ暑くても、早朝とか夜にふと感じる秋の気配というのはいいものですね。

秋は時候は勿論、「秋晴れ」、「天高し」、「名月」などの天文、「稲田」、「秋の山」、「水澄む」などの地理、「七夕」、「運動会」、「新酒」、「新米」、「稲刈り」、「豊年」などといった人事、「秋遍路」、「盂蘭盆会」といった宗教行事、そして「馬肥ゆる」、「鰯」、「秋刀魚」、「虫」などの動物、そして田畑や家の周囲の花や木と、実に多くの季語にかこまれた良い季節です。

農事に追われる季節でもありますが、身も心も爽やかで、一日の仕事を終えてからの時間は、俳句を作ったり、俳句の仲間とお互いの句をほめ合うのに絶好の時期です。そういえば、「夜長」という季語もありましたね。

長き夜や母の形見の衣を解き

高橋　白晶女

長き夜の母へとりとめなき電話

山田　野笛

どちらの句も秋の夜をしみじみ暮らす落ち着いた日本の女性の無理ない生き方が詠まれた句ですね。新聞もＴＶも殺人だ事故だ詐欺だと、ぶっそうなニュースばかりで、日本も少しおかしくなったかなと思いたくなるような世相ですが、この二つの句の様なしんみりとした生活で、一瞬一瞬の時間を大切に生きたいものですね。

今回引用した三句は、平成13年に俳人協会が出した「季題別・現代俳句選集」から採らせてもらいました。

これからも日毎に秋も深まり、物思うのに良い季節となります。昼間の気忙しさやいらいらなど皆忘れ、季節のものに自分の今の気持ちを託して、一句詠んでみませんか。そして、そろそろできた句の中から二、三句、お寺まで葉書で送ってみませんか。

【作品コーナー】

所藪　森本　清子

しば餅は昔話かしば青葉

大豆苗植ゑて夜雨にくつろぎぬ

辛夷咲くを目じるしに友訪ね

帰省子のまず仏壇に灯を点す　所藪　森本キヌ子

涼風をなびかせ坊ちゃん列車行く
青田道バイクで駆ける郵便夫　所藪　森本ミユキ

田植え待ち逝きし湯の友いとおしや
子供部屋渡り廊下に風薫る
気は急くが腰痛おこる田植中　所藪　森本ヤヨイ

日焼の子真白き歯にて笑い来る
行者坂滝となりたる梅雨豪雨
サングラス外して拝む摩崖仏　大町　森本　安恵

城址かくして一山の夏木立
一族の絶えたる森の今年竹
無縁なる墓の傾く草いきれ　大町　山川　瞳

朝蝉や柱の角で背中掻く
落し湯の染み込む崖に潜む蛇
くるくる寿し初挑戦や生御魂　船屋　近藤　広子

土用の入り夕餉に鰻焼く匂ひ
老人の四方山ばなし百合の花
雨上がり茹だる暑さや蝉時雨

本格派？国語雑学クイズ！

第一問　カタカナの部分を漢字で書くと？
①切手をハル・障子紙をハル②セイコン尽きる・セイコンを込める③立派なサイゴを遂げる・サイゴの一個を食べる

第二問　何と読みますか？（苗字です）
①四月一日さん②八月一日さん

第三問　次の意味は？
①墨客②酒客③客死④客歳

第四問　次の文の誤りは？
①家宝は寝て待て②厚顔無知③早起きは三文の徳④厄病神⑤濡れ手で泡⑥一睡の夢⑦貧すれば貧する

第五問　「月下氷人」とはどんな人？
①美人②仲人③薄情な人

抱腹絶倒！ダジャレクイズ？

一問目　ハンバーグは洋食。お茶漬けは和食。ドーナツは？

二問目　おじいさんなのに、おじいさんでないというのは誰？

三問目　朝日も出ないうちに鳴きだした新米のニワトリに対して、ベテランのニワトリは何と注意した？

四問目　おじいさんが「夜になったら飛び下りてやる」と言っている一体何をするつもりなのだろう？

五問目　すしを食べに言って「何でもいいから、とにかくトロをくれ」などと注文することを何と言う？

（答は８ページ）

書籍紹介コーナー

『お母さん、ぼくが生まれてごめんなさい』

著　者　向野幾世
発行者　産経新聞社

27年前に、わずか15歳で亡くなった脳性まひの男の子、山田康文君が作った一編の詩が今年4月、産経新聞に寄せられた投書をきっかけに、改めて人々に大きな反響を呼びました。

本書は養護学校の担任だった著者がこの詩を収録し、障害者の苦しみや喜びを書き綴って、二十四年前に発刊されたものを、今回、読者の強い要望にこたえて緊急復刊したものです。

復刊のきっかけとなった「詩」を紹介いたします。

ごめんなさいね　おかあさん
ごめんなさいね　おかあさん
ぼくが生まれて　ごめんなさい
ぼくを背負う　かあさんの
細いうなじに　ぼくはいう
ぼくさえ　生まれなかったら
かあさんの　しらがもなかったろうね
大きくなった　このぼくを
背負って歩く　悲しさも
「かたわな子だね」とふりかえる
つめたい視線に　泣くことも
ぼくさえ　生まれなかったら

ありがとう　おかあさん
ありがとう　おかあさん
おかあさんが　いるかぎり
ぼくは生きていくのです
脳性マヒを　生きていく
やさしさこそが　大切で
悲しさこそが　美しい
そんな　人の生き方を
教えてくれた　おかあさん
おかあさん
あなたがそこに　いるかぎり

著者の向野幾世さんは、「復刊によせて」の中で次のように述べています。

当時、障害児を囲む社会環境は非常に厳しいものでした。「お母さん、ぼくが生まれてごめんなさい」と、もの言えぬ幼い生命が叫ぶしかないような状況でもありました。

そして今四半世紀の時が流れました。

最も弱い立場にあるどの人にも、その人には生の使命があることにも気づきました。

十五歳で「ごめんなさいねお母さん」の詩を残して亡くなったやっちゃん（山田康文君）の使命。

それは、どんな人にも「生まれてきてよかった」「ありがとう、お母さん」といえる世の中を願ういのちの叫びなのです。・・・・・・

BCS賞　第43回 受賞作品（2002年）

BCS PRIZE-WINNING WORKS

ヴァレオユニシアトランスミッション株式会社

キッコーマン野田本社屋

岐阜県立森林文化アカデミー

群馬県立 館林美術館

公立はこだて未来大学

小松市立 宮本三郎美術館

浄土真宗本願寺派南岳山光明寺

住友不動産飯田橋ファーストビル・ファーストヒルズ飯田橋

聖籠町立 聖籠中学校

せんだいメディアテーク

平等院ミュージアム鳳翔館

HOOP

ふくしま海洋科学館「アクアマリン ふくしま」

福島県男女共生センター

宮城県迫桜高等学校

外宮神楽殿（特別賞）

JRセントラルタワーズ（特別賞）

晴海アイランドトリトンスクエア(晴海1丁目地区第1種市街地再開発事業)（特別賞）

光明寺テレフォン法話
0897-53-4585

お知らせコーナー

★「タイムファイブ・コンサート」
日　時　11月2日　午後7時
場　所　光明寺本堂
入場料　3千円

★「趣味のコーナー」作品募集中！
俳句、短歌、川柳、詩、書等々、何でも結構です。光明寺までお送りください。随時掲載します。

★「テレフォン法話第二集」近日刊行！
12話掲載・一部五百円

「光明寺だより」をご家族の皆さんでお読みください。

言葉のプレゼント

花を支える枝
枝を支える幹
幹を支える根
根は見えないんだなー

ークイズの答ー

国語雑学クイズ
第１問①貼る・張る②精根・精魂③最期・最後
第２門①わたぬきさん②ほづみさん　第３問①書画を書く芸術家②大酒のみ③旅先で死ぬこと④昨年のこと
第４問①家宝→果報②無知→無恥③徳→得④厄→疫⑤泡→粟⑥一睡→一炊　⑦貪する→鈍する　第５問ー②
ダジャレクイズ
一問目ーわ(輪）食　二問目ーひ（非）おじいさん
三問目ー日光を見るまでケッコーと言うな
四問目ーバンジー(晩じい）ジャンプ
五問目ー無差別トロ

★8月13、14日の両夜「新盆合同追悼法要」が盛大に行われました。五百名を超す参拝者がありました。

★8月16日、ジャズトロンボーンの第一人者向井滋春クインテットによる「ジャズライブ」が行われました。

★月刊誌「カーサ・ブルータス」9月号が書店で販売されています。光明寺が紹介されていますので、是非ご覧下さい。

★タウン情報誌「愛媛こまち」9月号にも光明寺が紹介されています。こちらも是非ご覧下さい。

★「安藤忠雄建築作品集」編集のためフィリップ・ジョディディオ氏（仏・フリーライター）が取材に見えました。作品集は英独両文併記で、六百ページを超える大書になるそうです。